

第1章

真庭地域からの提案 ～2010年の真庭人の1日～

ここ真庭地域には、世界に誇れる自然が残っている。

この豊かな自然に育まれてきた真庭の産業人は、大都市の企業では考えもつかない発想の製品開発や、大胆なリサイクルへの対応など、環境保全へ無条件に取り組む姿勢を持つ。木材の加工で生じる廃材を利用した自家発電事業や、自然の一部に同化させる植栽コンクリート製品の開発などは、その一例だ。

単に、自然を愛するだけではなく、環境保全を進めながら産業を創出する具体的な取り組みを始めているのである。そして、その成果が結実しつつある、2010年、秋。今度は、ゼロエミッション型地域のモデルとして、世界に誇れるまでになった……という未来からの物語。

当日は、朗読の間、会場は笑いと涙にあふれ、舞台と聴衆とが一つになっていた。夢を共感し合い、クライマックスに導いた主催者憲章。シンポジウムでは、締めくくりであったが、将来像をイメージしやすく、かつ内容もユニークなことから、本報告書では、冒頭を飾る論考とした。

～2010年の真庭人の1日～

西暦2010年、秋。

私、造り酒屋の均ちゃんですが、私の酒蔵では、10年ほど前から、タンクを洗う洗剤に、環境負荷の低い砂糖を原料としたものを使っている。

そんな私も、今年60才の大台になり、頭はもともと白かったが、最近ではすこし耳も遠くなってきた。それでも、真庭の川のせせらぎは、何故か鮮明に聞こえる。

そして、毎年この季節になると、真庭の山や川、そして街角から、元気のいい子供達のためにも楽しそうな声も聞こえてくる。それは小学生達の集団だ。

私が小学生だった昭和30年代には、課外授業と呼ばれたもので、最近、真庭の小学校でも2年生の2学期を、全てこの授業にあてている。子供達は、野山や川を自由にかけ廻りながら、自然の移り変わりや、そこに棲む動物や草花とふれあうのです。そうすることで、自然のもつ厳しさと優しさ、そして何よりも、その自然と人とのふれあいの大切さを、身をもって学ぶのである。

もともここで生まれ育った真庭人にとって、自然と

〈注釈〉

①造り酒屋の均ちゃん……

21世紀の真庭塾メンバーの辻均一郎。本主催者憲章の作成者兼朗読者である。地元で、造り酒屋を営みながら、観光とまちづくりに、中心になって取り組んでいる。本報告書では、第5章47～49ページにて、酒屋周辺の町並みを生かしたまちづくりへの提言を述べている。

②洗剤……

AGP (アルキルポリグルコース類) という洗剤。砂糖の誘導体のいくつかが有する、優れた洗浄効果を利用したものである。洗浄力は合成洗剤と同一であるが、環境への負荷はゼロに近い。詳細は、東京大学須藤助教授が、第2章22～23ページにて述べている。

③課外授業……

一般課程外の授業。昭和30年代では主に工場見学、映画鑑賞や野外での動植物の観察などを行っていた。



の関わり方は、親から子へ、あるいは地域の先輩達によって、ごく普段の生活の中で、文字どおり「自然」に身につけているものである。そんな真庭には、今も自慢のできる自然がいっぱいある。それは真庭人が、昔からかけ廻った野山や川であり、人と関わってきた、つまり人に大切にされてきた自然である。

3年前より、勝山、久世、落合の小学校と交流を兼ねた体験学習を希望する、全国の小学校が増え、今年度は関西を中心に30校余り、延べ1800人の児童、教員が、真庭に来ている。これには、全国に“ミセス・グラウンドワーク”^④の異名をとった、久世の牧野さん^⑤を中心に、真庭のママさんパワーを結集した強力な体制でバックアップされている。

そんな子供達に人気なのが、冬季の温水プールである。これには地元の製材業の自家発電^⑥による、電気と蒸気が使われている。これは、木材の加工過程で出てくる、廃棄木材を再利用したもので、製材工場は勿論のこと、現在では、町役場や小学校をはじめ、一般の家庭も7割近くを、この電気で賄っている。木材から電気が生まれる、

④グラウンドワーク……

自然環境や地域社会といった私達の生活において最も基本的な要素を整備、改善してゆくという意味と、グラウンド（生活の現場）に関するワーク（創造活動）といった意味をあわせて持っており、住民、行政、企業が三位一体となって行う地域の環境改善活動のこと。真庭地域における、グラウンドワーク適用の考え方については、第6章の章末コラム62ページを参照されたい。

⑤牧野さん……

21世紀の真庭塾メンバーの牧野由美子。地元で、製材業を営みながら、岡山県のまちづくり委員などもつとめている。本報告書では、第3章28.30.31ページにて、まちづくりや教育に関する持論を述べている。

⑥地元の自家発電……

真庭地域における、木材産業の典型的な木材加工プロセスの中で生じる、廃棄木材を利用した発電方法。現時点では1950kw/Hであるが、その地域の廃棄木材の全量を利用出来る設備があれば、140万kw/月の発電は可能である。又、一般・公共の配電には「真庭エネルギー組合」などの設立も必要である。

という事実も、真庭では、子どもたちが自然と人の生活とのつながりを学ぶ大事な教材である。今では、中島君や山下君の工場の自家発電所の見学会が、定期的に行われている。

さらに、この発電によって生じた灰も、残らず利用されている。それは、大月君のところで考え出された、新しいコンクリート製品「セメタント」を製造する時に混ぜられるのである。この「セメタント」は、20世紀のコンクリート製品とは違い、日数がたつと、自然に戻るといった特徴をもったもので、川や公園の整備には、とても都合のいいものである。旭川も、この新しい材料を使った工法により、昔の川の風景を取り戻し、真庭の特徴的な風景の1つとして、地元の人たちにとっても親しまれている。

このことは、そこに棲む魚達にとっても、また私たちのように昔の旭川を知っている者にとっても大変幸せなことである。この様な真庭人の体験や努力によって、この地域の自然も表情が豊かになり、特に淡水魚の数も、昔に戻りつつある。このことは、最近、魚の病も治すことでも有名になった、宮島院長が言うんだから本当のこと

⑦中島君や山下君……

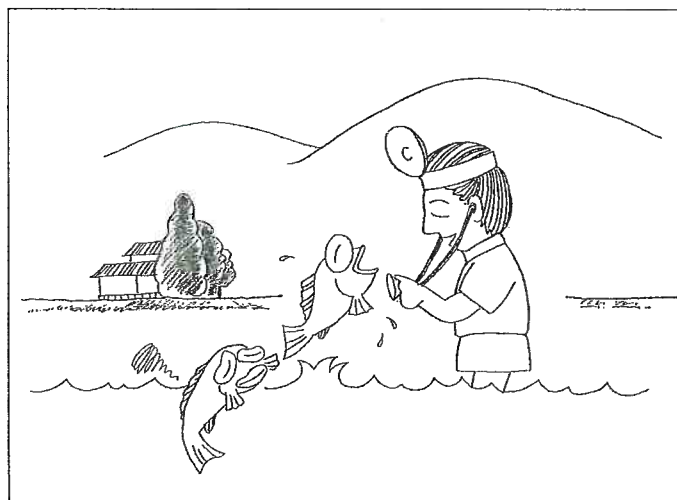
21世紀の真庭塾メンバーの中島浩一郎と山下豊。2人とも地元で、製材業を営みながら、木材産業発展にも取り組んでいる。本報告書では、第4章39ページ、第5章45～46ページにて、自家発電の概要やその将来の展開を述べている。

⑧大月君……

21世紀の真庭塾のメンバーの大月隆行。環境に配慮したコンクリート製品の開発に挑む、若き起業家の1人。本報告書では、第3章28～33ページ、第4章38ページ、第5章45～46ページにて、環境問題に関する持論とビジョンを述べている。

⑨セメタント……

従来のコンクリートは、原料そのものは自然のモノであるにもかかわらず、その製品特性や工法によって「人工」のイメージが強い製品だった。この「セメタント（仮称）」は朽ちることをあらかじめプログラムされたもので、自然と対抗せず、時間の経過とともに自然と同化していくという、全く新しい発想で開発されたコンクリート製品である。同様の自然融合型の製品開発の取り組みについては、第3章28.31.33ページ、第5章46ページを参照されたい。



だろう。

旭川は、もともと淡水魚の種類がとて多く、水生昆虫を加えると、その数は実に80種にも及ぶ。『旭川の清流を後世に残そう』という、行政と町民による永年の事業が実を結び、昨年、全国では一番の規模と内容をもつ淡水魚水族館が完成した。これを記念して、来年は世界中から淡水魚の研究者達が、ここ真庭に集い、1ヶ月にわたって、様々なセミナーやシンポジウムの開催が決定している。すでにこの春から、英国とブラジルの調査団が、真庭に入り、本格的な研究活動を開始している。

この様に、植物や小動物、さらには魚の気持ちになれる名人を数多く育てつつある真庭には、全国から、そして世界からも注目が集まっている。今年オープンした、地元岡山大学の環境理工学部真庭研究所のオープニングシンポジウムには、環境工学で有名な米国マサチューセッツ工科大学の専任教授や、全国から環境問題に取り組む学生達が、多数、真庭を訪れ、その後も一般家庭にホームステイしながら、研究活動を続けている。

真庭も、最近国際的になったし、若い人もたくさん住

⑩宮島院長……

21世紀の真庭塾のメンバーの宮島啓人。地元で、開業医を営みながら、勝山町月田地区のまちづくり運動や環境ボランティア活動の、中心的役割を果たす。本報告書では、第3章28～33ページ、第4章37ページにて、これらの活動を紹介している。

⑪淡水魚の種類……

1997/12月地球温暖化防止京都会議を記念して始めた実際のコンサート。日野皓正を中心にアジアのミュージシャンが多数出演する。

⑫「旭川の清流を後世に残そう」……

勝山町のふるさと創生事業の一つ。住民が旭川に棲む生きものに興味を持つことから始め、結果的に清流を残すことを目指した事業。「水魚と旭川」をテーマにシンポジウムや流域町村のサミット等を開催している。

⑬淡水魚水族館……

「旭川の清流を後世に残そう」事業の中で、町民の希望としてあげられたもの。真庭地域全体としても、ぜひ実現させたいものでもある。

⑭岡山大学環境理工学部真庭研究所……

本シンポジウムの協力機関である、岡山大学環境理工学部の架空の研究機関。2010年には、環境科学と環境産業のテーマとする産学協同の研究開発機関を、真庭の企業を中心として誘致・設立(予定)。

んでいるし、とてもいいところだと感じるこの頃です。

さて、13年前の「地球温暖化防止京都会議」を記念して始まった^⑮“LIVE ON THE EARTH”のコンサートが、今年は久世町のエスパホールで、明日から10日間開催されます。「アジアの力・音楽の力そして地球との約束」をテーマに、今やベテランの域に達した日本のジャズシーンの大御所・日野皓正を始め、アジアの各地から、実力派のミュージシャンが多数出演するこのフェスティバルには、是非とも行こうと思っています。そういえば、13年前の10月10日に開いたシンポジウムが、今の真庭の色々な活動のきっかけになっているのかなァー、と思うわけで……………。

そうです。そのシンポジウムこそ、本日のこのシンポジウムなのです。

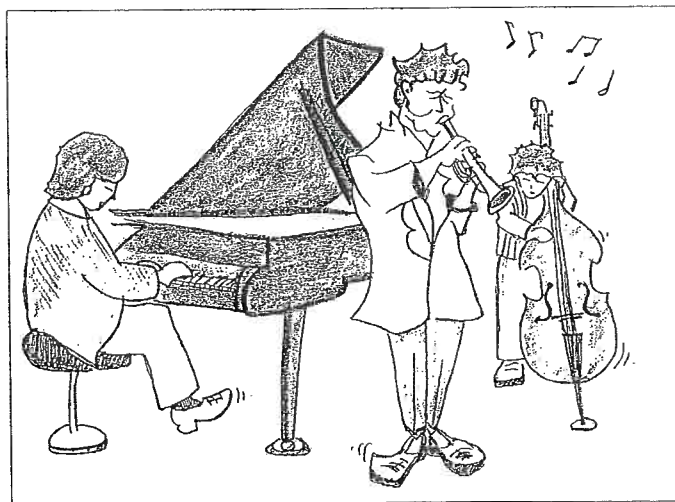
2010年の真庭の夢を、少々オーバーに語らせて頂きましたが、ここ真庭では、全国に、そして世界に誇れる取り組みが、住民においても、企業においても、既に始ま

⑮地球温暖化防止京都会議……………

1997年12月に京都で開催された、気候変動枠組み条約締結国会議。先進国における法的拘束力を有する「温室効果ガス排出削減値」が定められた。日本は2008年から5年間の排出量を1990年に比べ6%削減となった。真庭地域では、これに先がけて数々の対策に取り組んでいる。

⑯LIVE ON THE EARTH……………

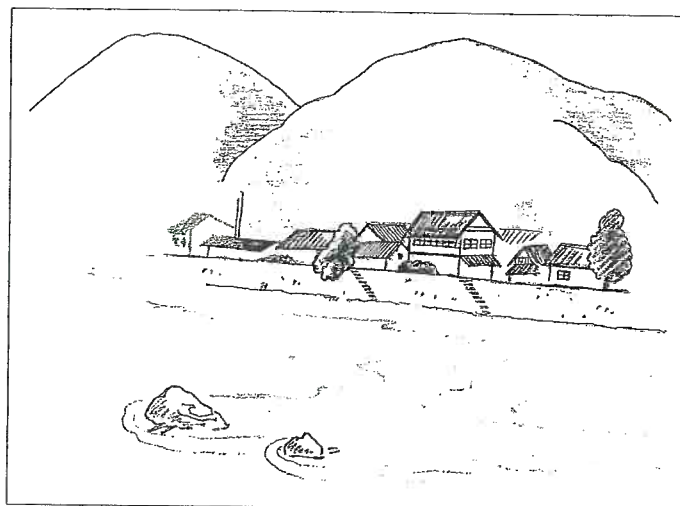
上記の地球温暖化防止京都会議を記念して始めた、現実のコンサート。日野皓正を中心に、アジアのミュージシャンが多数出演する。



っていることは、まぎれもない事実です。このことは、我々真庭人の誇りでもあり、次の世代に伝える大事な財産だと思っています。

この想いを、さらに行動に移し、素晴らしい21世紀の真庭を、皆様と一緒につくろうではありませんか。今日のこのシンポジウムが、そのきっかけとなれば幸いです。

それではみなさん、2010年の素晴らしい真庭で、またお目にかかりましょう。



真庭郡は岡山県の北西部、岡山中心部を流れる旭川を遡った山間の地域である。

古代から吉備、山陰、そして畿内からの影響を受けてきた当地方は、旭川や備前・伯耆街道を南北軸に、出雲街道を東西軸に流通・交通の要衝として機能し、現在に至っている。

中世の流通・経済に関係する史料は少ない。ただ、朝廷直轄領の久世保からも銭貨をもって貢租が進納されており、当時既に市場など地域内で換金が行える経済機構が成立していた可能性が高い。また、中世に起源を持つと伝えられ、郡内に点在した牛馬市場も、近世・近代を通じて近隣、大坂への牛馬の供給市場でありつづけ、形を変えて現在も、岡山県経済連総合家畜市場として存在している。

併せてこの地は、旭川河口の城下町、岡山で大量に消費される燃料等の供給源として重要な機能を果たしていた。江戸期には米穀・薪・炭、そして鉄が郡内の河岸町、高田（現勝山町）・久世（久世町）・垂水（落合町）などで高瀬舟に積まれ岡山へと送り、帰途には塩など南部の物資が荷揚げされ、地域内、また山陰へと流通した。木材についても古くから豊かな土地柄で、近代に至るまで旭川を利用した筏流しにより県南に向けて輸送が行われており、こうした経緯を基礎に現在の主要産業である木材産業へと発展を見せる。

特に鉄については、一般に美作国といえは「鉄」とイメージされるほど著名である（ただし、白猪屯倉の設置、戦国期の尼子・毛利・宇喜多氏等による争奪など、理由のすべてを「鉄」で説明するのは疑問である）。

美作国では慶長初年に和泉国の商人小坂屋市左衛門の「御内衆」景山氏が高田町・久世町に居住し、国内鉄山の運営に当たっていたが、早くも寛永7年（1630）には津山城主森家から操業停止を命じられているのである。

その理由は、つまり公害である。

これは製鉄の工程「鉄穴流し」で発生する濁水が井堰に土砂を堆積させるのが原因で、井堰の外にも通船路の埋没など多くの問題が起

った。濁水問題は製鉄の盛んになる江戸初期、既に全国的な社会問題となっていた（その後、灌漑する季節を避け操業するなど、改善が行われたりしたが、それでも訴訟が頻発している）。その一方で、製鉄産業は農閑期の農民の労働の場を提供したり、鉄穴流しによって形成される谷間の平坦地や沖積地が水田として開発されたりする、という現象も起こっている。今も昔も、産業と環境の問題は複雑だったようである。こうした製鉄は明治以降、次第に鉄鉱石による洋式製鉄に取って替われ、当地方でも次第に衰頹、明治20年代にはほとんど行われなくなった。

近代には従来の要素に加え、郡北部で栽培されていた煙草「山中刻」の加工（専売公社が久世町に置かれていた）や、生糸の生産などが盛んに行われ、後者については現在も繊維関連企業の操業という形で、現在も継続している。

流通の要として、真庭郡を特色づけていた高瀬舟などの河川交通は、明治末期の福渡（現建部町福渡。旭川中流域の河岸町）までの鉄道開通、そして大正末年の鉄道全通により、衰退を余儀なくされた。以降、人の往来をはじめ、木材や炭など特産物の出荷に至るまで鉄道による貨物輸送が主流となり、どの町にも駅舎周辺に新しい商業市街地が形成・拡張されている。更に近年では道路網の整備、自家用車の普及等によって、鉄道も衰微するにあたって、道路沿いに駐車場を擁する郊外型の商店が増加しつつある。

こうして歴史を眺めてみると、真庭郡の流通は産業も含めて、河川から陸路への荷揚げ、荷下ろしという仕組みがあって発展を見せてきたといえる。つまり、そこに当地域の本質があるだろう。そうした地域で培われた特性は、河川交通、鉄道の隆盛、自動車の普及に高速道路網の整備、という波によって変容しつつも、現在に引き継がれているのである。